

世継寂窓と王維の「輞川図」

内 田 誠 一

(一) 序

世継寂窓（一七六六―一八四三）は江戸後期の京都の豪商であり、絵画・和歌・茶道に通じた文化人でもあった。絵画は月僊（一七四一―一八〇九）に師事し、後に元明の画風を慕ったとされる。ところで、架蔵の貼交屏風には、寂窓とその知友の筆になる、詩歌や文章が書かれた八葉の紙片が貼られている。その中には寂窓筆の「画山水詞」と題された文章の一紙も含まれる。文中には、寂窓が若い頃に石刻本の王維「輞川図」を模写し、天保六年（一八三五）の七月に、さらにそれを模写したことが記されている。江戸時代に王維「輞川図」の石刻本が舶来していたことを物語る資料であり、また寂窓の王維への敬慕を示すものとして興味深いものがある。

本稿では資料紹介も兼ねて、この「画山水詞」の内容を些か考察してみたい。

(二) 世継寂窓について

世継寂窓は、『平安人物志』の文化十年版・文政五年版・文政十三年版・天保九年版で、文人画や連歌の欄に掲載されており、広く文人として認知されていたことがわかる。『平安人物志』の記載は簡明すぎるので、古筆了仲『扶桑画人伝』（一八八八年）の巻四を繙いてみると次のようにある（句読と中黒、内田）。

世継氏、名ハ直員、字ハ伯周、希仙ト号ス。初メ台六、晩年寂窓ト改ム。京師ノ豪富家。俗称岐草屋八郎兵衛ト云フ。画法ヲ月僊ニ学ンデ修シ、後チ元明ノ画風ヲ慕ヒテ益々研究シテ松毬ヲ画ク。殊ニ風致アリ。点茶及和歌・連歌ニモ堪能ナリ。又飲食、魚鳥ノ風味ヲ知りテ其品ヲ撰ブ「妙ナリトイフ。就中茶道ニ長ゼリ。又手造リ茶碗ヲ作ルニ巧ミナリ。当時世ニ平安ノ六本杉ト称誉セラル、ノ一人ナリ」

この文章からは、絵画や和歌・連歌のみならず、作陶にまで手を染

める多能な人物であることが理解でき、また食通ケルムとしての側面をも垣間見ることができよう。「京師の豪富家」とあるように、経済的に恵まれていたからこそ、多方面の文雅な遊びに耽溺し、かつその才能を磨くことができたのではあるまいか。

徳力富吉郎「花竹庵随想28 世継寂窓」には、そんな寂窓の生活ぶりを窺わせる内容が見られる。

京の町のだ真ん中、三条の高倉東入ル北側。元の日本銀行の辺りが、世継さんの本宅であった。寂窓は、本名直員（なおかず）、大変な茶人であり、また歌人でもあり、歌は景樹門であつたらしい。……（中略）……画もまた上手で、私は大徳寺の牧谿の柿・栗の二幅対の模写の幅を見た事があつた。見事な出来であつた。

世継さんは洛東岡崎村に別荘を造つた。当時岡崎村は京都の裕福なる市民の別荘地として一流の土地であつた。紳商達は皆、岡崎に別荘を造つたのである。……（中略）……

宏壮な別邸で、広さ三千坪。すばらしい大広間が中央にあり、北側には庭つづぎに閑燕庵という茶席ができている。本座敷の縁近く、有名な梅ヶ枝の手水鉢がある。俊寛見返りの松は亭々として緑したたるばかり。……（中略）……

他に、桧垣の塔という石塔もあつたし（朝鮮のものか）、庭内には、紅枝垂桜の大木もそびえていた。……（中略）……

徳川時代発行の『花洛名勝図絵』中にも木版挿図で載つていた岡崎世継直員別邸は、当時流行の狂句にも詠まれていた。

小笠着オガサキよ月尚ツキナホカズほかすむ雨の暮

寂窓の別荘には青松が聳え、手水鉢や石塔を据えた別邸の庭園が自慢であつたことがわかる。豪商の面目躍如たるものがある。

寂窓の絵画作品として架蔵の「枇杷図」を掲げておく（図1）。卷止の「壬辰夏」の墨書から、一八三二年作と推定される。水墨の没骨法で枇杷を画いて、「直員」と署して「直員」（朱文方印）の1印を捺している。画賛は大徳寺二十世の太室宗宸で、茶道・香道を善くした高僧。「不作金丸懼、□為千顆珠」と題して、「如嬰」（白文長方印）の関防印と「宗宸／太室」（連珠印・白文方印）・「通櫻翁」（朱文方印）が捺されている。この作品から、寂窓は太室宗宸と文雅な交わりをしていたと考えられよう。また、上田秋成や画家の蕪村・応挙などの交流も、かねてより指摘されている。

図1



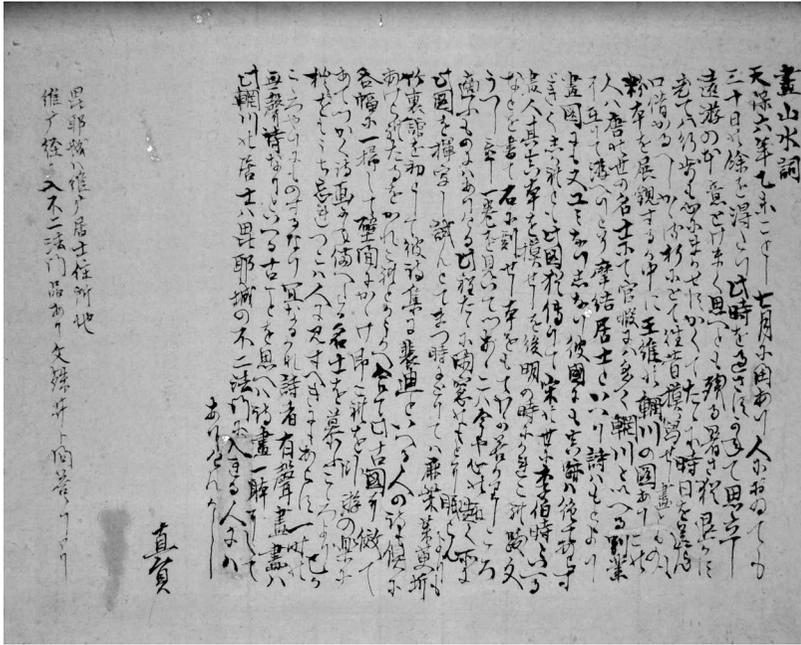


図2

寂窓筆「画山水詞」(図2・3)には王維の輞川図巻を臨摹したこ

(三) 寂窓筆「画山水詞」に見える王維の「輞川図」

とが記されて

いる。

王維(六九

九?~七六

一?)は中国

盛唐を代表す

る自然詩人。

詩文・書画・

音楽(作曲と

演奏)・舞踊・

造園に優れた

多芸多才の文人であった。王維は、初唐の宮廷詩人・宋之間が生前

所有していた別荘(正確には莊園)を購得した。これを土台にして、

自然美を崩さぬように造園し、新たに亭館を幾つか建造したよう

である。

王維はこの輞川荘から二十の景勝地を選び、亡友の遺児である年

少の裴迪と閑暇に絶句を賦した。世に名高い「輞川集」である。ま

た王維は、輞川荘の自然美を詩で表現するのみならず、彩管を把つ

て「輞川図」を描いたとされる。しかし、「輞川図」の原画のみな

らず、王維の真筆書画は一点も伝世していない。朱景元の『唐朝名

画録』の妙品上八人の一人に王維が挙げられ、「復画輞川図、山谷郁

郁盤盤、雲水飛動、意出塵外、怪生筆端」とあり、張彦遠の『歴代

名画記』巻十に「清源寺壁上画輞川、筆力雄壯」とある。これらの

記載から、王維が「輞川図」を描いたのは「壁上」であって、紙や

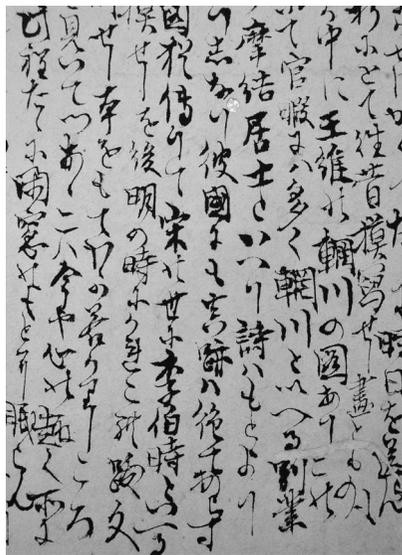


図3(部分拡大)

絹の上ではなかったことが推測される。^(注1)

ところが、唐末から宋代にかけて大量の「輞川図巻」が制作されたようである。画かれる景勝地の順序がやや異なることはあつても、その殆どが同じような構図で、王維画を臨摹したという体裁をとるのが通例である。しかし、それはあくまで建前であつて、実のところ、これらは王維の真蹟とは無縁の、後代における〈作り物〉、即ち原作とは無関係に虚構的に創作した作品なのではないか、と筆者は考えている。この問題については別な機会に論じたい。

では次に、「画山水詞」(紙本墨書・法量は縦三一・五×横三九・五糎)を翻刻する。読みやすさを考えて句読や濁点を付し、いま仮に段落を分けた。なお、誤字の直後に「」で正しい文字を示した。

画山水詞

天保六年乙未とし七月に閏あり。人におゐても三十日の餘を得たり。此時を過ぎず、かねて思立し遠遊の本意をとげまく思へども、残る暑さ猶退かず、老てハ行歩も心にまかせず。かくてたゞに時日を送らんも口借「惜」かるべし。

かかる折にとて、往昔模写せし画どもの粉本を展観するが中に、王維の輞川の図あり。この人は唐の世の名士にて、官暇にハ多く輞川といへる別業に在りて遊べりとぞ。摩詰居士といへり。詩ハもとより、画図にも又工ミなりしなり。彼国にも真跡ハ絶てあらずときく。

しかれども此図伝りて宋の世に、李伯時といへる画人、其真本を模せしを、後、明の時にかれこれ跋文などを書いて石に刻せ

し本をもて、わが若かりしころ、うつし置し一卷を見いでつ。あゝこハ今や心の趣く所に適ふものにハありける。

此程たゞに閑窓のもとに眠らんよりも、此図を揮写し試んとて、まづ時にとりてハ、鹿柴・茱萸圻「沂」・竹裏館を初として、彼詩集に裴迪といへる人の詩も俱にあげられてるを、かれこれとかうがへ合て、此古図に倣て各幅に一掃して壁間にか、げ、即これを臥遊の楽にあてつ。かく詩画に手備へたる名士を慕ふこゝろより、己が拙キをもうち忘れつ。こハ人に見すべきにもあらず。一時のこゝろやりにもものするなり。宜なるかな。「詩者有声画、画ハ無声詩なり」といへる古ごとを思へバ、詩画一牀にして此輞川の居士ハ毘耶城の不二法門に入れる人にハありけんかし。直員

毘耶城ハ維广居士住所地。

維广経□入不二法門品あり。文殊苾芻問答ノアリ。

「天保六年」は西暦一八三五年、寂窓七十歳の年である。その七月の閏月に、そのむかし模写した画を並べたところ、その中に輞川図があつた。それは、寂窓が若いころに臨模した一巻であつた。臨模したものは、宋代の「李伯時といへる画人」が王維画の真本を模写したのを、明の時代になつて跋文を書いて石に刻したものだ。

王維の「輞川図」の石刻本は数種あるようだが、最も有名なものは、郭世元摹郭忠恕筆の石刻本「輞川図巻」である。万曆四十五年(一六一七)の刻。沈国華が来陽伯家より郭忠恕の摹本を購求して、それを郭世元に摹刻させたものである。

文中にある李伯時は李公麟（一〇四九〜一一〇六）。仏道に帰依して禅に通じた人物。「輞川図」の筆法を用いて制作したという「龍眠山莊図」が有名であり、「輞川図」も描いたとされる。だが、李公麟の「輞川図」を石に刻したものは寡聞にして知らない。『文人画粹編』第一巻「王維」（中央公論社、一九七五年）にも見えない。もし寂窓が臨模したのが、李公麟摹「輞川図巻」の石刻本であったとしたら、極めて珍しい拓本を所蔵していたことになろう。

しかし、「画山水詞」の内容から考えると、寂窓が臨模した拓本とは、郭世元摹郭忠恕筆の石刻本「輞川図巻」である可能性もあろう。というのも、他ならぬ郭世元本も、実は「明の時にかれこれ跋文などを書て石に刻せし本」だからである。^(注2) 臨模してから数十年経過して李公麟本を摹したと記憶違いをしているのではあるまいか。

もちろん李公麟画の石刻本であった可能性も残される。今となつては、李公麟本なのか、或いは郭世元本なのかは知る由もない。いずれにせよ、江戸時代に中国より石刻本の「輞川図巻」が舶載されていた事実がここより知れる。

なお、小林太市郎『王維の生涯と芸術』（全国書房、一九四四年）二六四頁に、郭世元本の拓本について、「その拓本も今は多く世に伝はらない」とある。参考までに、架蔵の郭世元本「輞川図巻」から、「画山水詞」に特に挙げられた三つの景勝地「鹿柴」（図4）「茱萸泚」（図5）「竹裏館」（図6）の部分を掲げておく。鹿柴と竹裏館は、輞川集の中で特に人口に膾炙した詩であるから、寂窓がその名を挙げたことは理解できるが、茱萸泚も前の二首と並べて挙げたのは、とりわけ寂窓の意に適ったものであったと考えられよう。「鹿柴・茱

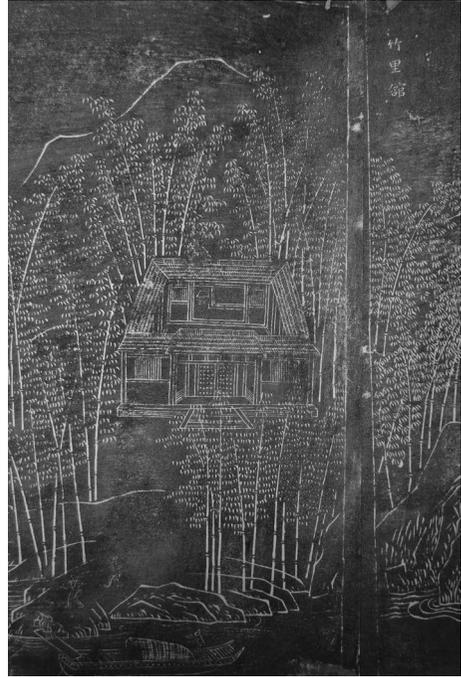
図4 鹿柴



図5 茱萸泚



図6 竹裏館



荻泷・竹裏館を初として…此古図に倣て各幅に一掃して」（傍点内田）とあるが、この三景以外にどの景点を模写したかは不明である。

（四）結 語

寂窓はその経済力にものを言わせて、唐土より舶載せる書画類を購入していたのではないかと推測される。そして、この「画山水詞」において「輞川図」のことを敢えて記述した背景には、輞川荘ほどの荘園を持たずとも、広大な本宅と別邸を構えて風雅な生活に浸っていた自分を、王維と重ね合わせようという気分があったのではないだろうか。王維は多芸多才な風流才子であったが、寂窓は王維に負けじと、幅広く文学芸術に手を染めていたのではないかと考え

るのは想像が過ぎるであろうか。

■注

- （1） 古原宏伸「王維画とその伝称作品」（『文人画粹編』第一巻「王維」（中央公論社、一九七五年）には、「王維が巻軸の形式の輞川図を描いたとする記録は、遂にない」とある。
- （2） 架蔵の郭世元本「輞川図巻」を見るに、跋文が多く刻されている。郝経（五行）、姚惟清（五行）、楊士奇（六行）、邢侗（十一行）、来復（十六行）、温日知（十三行）、郭世元（八行）など多数ある。（一）内は落款を含む行数。

〔二〇一三・九・二六 受理〕